ケミヤルヴィ　ーはしっこの村ー

松田　恵美子

私にとって遠くて深い場所となったフィンランド最北のエリア、ケミヤルヴィ。同じ北端にあっても比較的賑やかなロヴァニエミに滞在していた私と友人はその日、オーロラ鑑賞のためだけにケミヤルヴィへ移動することになっていた。本当に来るか確信が持てない長距離バスを、果たしてここで正しいのか小さな標識があるだけの停留所で待つには不安な要素が多い。トランクケースと荷物で膨らんだ手持ちバッグを片手に、冷たくなっていく体を揺らし押し黙ったまま時間だけが過ぎていく。

結局バスは五分遅れただけでやって来た。滞在するうちにわかったことは、フィンランドは時間に正確な国ということだ。市内の路面バスは頻繁に行き来しているし、飛行機もなんら問題ない。

バスに乗るとすぐに窓から見事な紅葉が見えはじめた。私たちが滞在した九月中旬は、白夜の夏と、一日の大半が夜になる冬の間をたった一週間だけ訪れる束の間の秋の季節だった。寒暖差が激しいため、限られた数種類の広葉樹が信じられないくらい真っ黄色に染まる。

バスが走るのは、主に黄色のシラカバ並木に挟まれた永遠に続きそうなまっすぐの道。フィンランドに到着してから都市部でさえ田舎だと感じていたが、改めてこれらの自然に心揺さぶられるよりか、こんな何もない平凡な場所が、政治やデザインの面で最先端を走っていると理解する方が難しいくらいだった。

目的地へは一時間ほどで到着した。下車駅はケミヤルヴィにある”kuukiuru”という場所。便宜上「クウキウル」と発音していたけれど、フィンランド語には結局最後まで慣れることはできなかった。ほんの一時間の乗車が想像以上の長い旅になったのは、停留するたびに見慣れない駅名を確認しなければならず、その度に不安が訪れたからでもある。バス停といっても”kuukiuru”と書かれた小さな看板が道の途中に佇むだけで、他は特に何もない。ぼうっとしていると見過ごしてしまうほどだ。下車した客は私たち二人だけで、到着の瞬間までとにかく心細い旅になった。

バスを降りると冷気が体を刺した。しかし十分すぎる防寒着のお陰で耐えられないほどの寒さではない。バス停のすぐ右横に続く細い小道は、整理されているとは言い難く、何とかトランクケースを引きずるので精一杯。徐々に視界がひらけてくると、程よく刈られた芝生の中に赤い建物を三つ見つけた。

どうやら宿らしい。何とか一番手前にあった建物まで行き、呼び鈴を鳴らす。

玄関の扉を開けてくれたのは主人だった。見上げるほどに背が高く、肉付きがよくて一見怖そうだ。無愛想に挨拶をしながら、体のわりに小さな顔の中で時々つぶらな瞳を瞬きさせた。
「ようこそいらっしゃい」
主人は荷物を脇へ置くよう身振りで示すと、私たちを椅子へ座らせた。暖房が効いた部屋に安堵のため息が出るも、嗅いだことのない妙な匂いに戸惑った。奥の方を見ると女主人が顔を覗かせてこちらを見ているのに気がついた。
「では、まず先に料金を支払ってもらいます。夕食なし、朝食なし、部屋は後で案内します。もし朝食が食べたければ十ユーロ追加です」
やって来た客全員に同じことを言っているのだろう、癖はあるけれど流暢な英語で一気に話をして説明が終わった。
「私たち日本から来ました」
支払いをしながら私が言うと、主人は「ジャパン？」と少し興味深げにこちらを見遣った。
「ノーザンライトを見にきました」
あとで調べたところ、ノーザンライトはアメリカ英語なのでヨーロッパの人は使わないそうだ。だから主人は両肩をあげて「オーロラねぇ」と言った。
日本には少々興味はあるが、ノーザンライトではなくオーロラについては見えるかもしれないし、見えないかもしれない、主人の言い方にはこんな想いが込められているのだろう、ここではオーロラはそれほど大した価値を持っていないようだった。
主人はさっそく準備していたシーツを持ち、ぶっきらぼうに手招きして一緒について来るように言った。外へ出ると先ほど見えた残り二棟のうち、ロビー棟に近い一つへ案内された。一棟ずつ適度な間隔が設けられ、広い芝生の庭に添うよう三つの棟が並んでいる。玄関の扉が開くと急な階段の先にもう一つ小さな扉が見えた。主人は体を縮めて部屋の中に入り、淡々とした調子で鍵の使い方、電子レンジの使い方などを説明する。
「夕飯を食べるところはありますか？」
ここへ来るまでの間、何らか店らしきものを見なかったことを思い出し、主人がシャワーの説明をし始めたのも忘れて尋ねた。
「ノー。ここで夕食は用意できないし、そうだなぁ、三十分ほど車で走るとスーパーがあるよ」
主人はシャワーの取っ手を元に戻し、体だけこちらへ向けて目をそらしながら言った。
一体そんな遠い場所へどうやっていくのか、私たちが taxi や bus について騒ぎ始めるとその単語だけを聞き取った主人がもう一度こちらを見た。
「車に乗るか？」
聞き取りにくい小さな声だったので、理解するのに少し時間がかかった。

スーパーへ送ってもらうことに決まり再び外へ出ると、心地よく澄み切った空気が庭いっぱいに充満していた。主人が車の準備をする間、友人とコテージの反対側へ周って驚いた。
一面に川が流れていたからだ。左右に延々と伸びている川の向こう岸には色を染めたシラカバやカエデが広がり、広葉樹と空の景色が水面に映って反射している。ボートはあるにはあったけれど、この寒さでは向こう岸へ渡ってみたいなどという気にはなれない、ただ呆然と思いを馳せることぐらいしかできない。ネットの口コミには、ここにオーロが出現するとすごいことになる、と書いてあったのを思い出した。

主人の声に呼ばれ、興奮も冷めやらぬうちに車に乗り込んだ。聞きなれない音楽が流れている。ヘルシンキでは一度も耳にしなかったタイプの曲だ。リズミカルな曲に合わせて女性が歌っているが、慣れない曲調のせいで居心地が悪い。フィンランド民謡だとかそんなところだろう。主人は一言も話さず、先ほどの高ぶりはどこかへいってしまい、初対面の者同士が会った時に醸し出す、気まずい空気が狭い車中に漂っていた。
並木道を三十分以上走ったところで、ようやく人気を感じる町に出た。民家が少しある程度の場所に、小さなスーパーが道路に挟まれて立っているだけだ。私と友人は部屋で食べるためのピザや果物、ヨーグルトなどを購入した。
「ビール買ってあげる?」
友人が手にしていたのはヘルシンキ市内でよく見かけたクマの柄が入った黒い缶ビールだった。”KARHU”と書いてある。
「それいいアイデア」
車で送ってもらったお礼ということで、主人にビールを一本購入した。
「送ってもらってありがとうございました」
車内に戻り、さっそく友人は嬉々として片言の英語で主人に缶ビールを渡す。
少しの沈黙の後、主人はちょっとだけ後部座席を振り返ると、あとはミラー越しに何か言った。小さな声で何と言っているのか分からない。
大げさに手を横に振る動作でようやく主人がビールを受け取ることを断っていることに気がついた。”No,Thank you”と言ったらしい。
「渡さなくていいんじゃない?」
一向に受け取ろうとしない主人に、いつまでもビールを差し出したままの友人を見かねて声をかけた。
友人は腑に落ちない表情をこちらに向けたが仕方なく手を引っ込めた。その時ミラー越しの主人と私の目が合った。主人はすぐに私から目をそらすように俯き、急いでハンドルを握った。

エンジンがかかると再び陽気な音楽が流れ始める。
「このビールどうする？」
しばらくしてビールを片手に握ったままの友人がこちらを向いた。
「とりあえず今は渡しても無理じゃないかな」
欲しくなくても遠慮しながらでも受け取ればいいのに、という考えは果たして日本人的発想なのだろうか。そんなことを考えている間に私たち二人ともこの気まずい空気に飲み込まれてしまった。友人がビールを袋へしまうと車内に再び沈黙が戻った。

「トナカイ！」
随分と車で走った頃、ビールの一件でさらに空気の悪くなった車内で、友人が突然声を張り上げた。しかし、場違いな場面で友人が大声を出してしまったのには理由があった。私たちの旅の行程にオーロラを見る他「トナカイを一目でいいから見る」というおまけの目標が付いていたからだ。
一瞬の出来事だった。立ち並んだ樹林の隙間から、角を生やした茶色い牛のようなものが放牧されているのが見えた。よく見ると牛よりも顎がしゃくれていてずっと体が引き締まっている。この時のトナカイが、実はフィンランドならどこにでもいるというヘラジカだったのではないかと疑い始めたのは一年以上も経ってからだ。たまたま見ていたテレビ番組で紹介されていたヘラジカが、記憶の中のトナカイと見事に重なったのだ。
「レインディア！」
何も知らない友人は大声で叫んでいた。
この声で空気の流れが変わり、私たちは溜まっていた思いを後部座席で話し始める。
“Do you have Raindeer in Japan? But They are not ……”
主人がミラー越しに何か言った。
主人の突然の参入に言葉を返せないでいると、もう一度声が聞こえた。
“Anyway,which part of Japan are you from?”
“We come from Tokyo”
友人が運転席に向かって声を張り上げた。
“TOKYO!”
次の瞬間、鳴り響く民謡の中から主人の笑ったような声が聞こえた。
空気の流れがまた変わった。これまでの不機嫌な主人からは想像できない親しみのある言い方に私たちは一瞬戸惑う。
「イエス、トウキョウ」

気がつけば、私と友人は声を重ねて答えていた。
運転席のミラーから、主人が小さな目を丸くさせてこちらに向かって微笑んでいるのが見えた。そして、自分はいつかトウキョウへ行ってみたいんだと言った。
首都ヘルシンキからはるか北上したこの田舎町で、トウキョウを夢見る中年の男性がいたことに何とも奇妙な気持ちがした。もしかすると、遠い東方の国に抱く主人の TOKYO は実際とはかけ離れているのかもしれない。しかしトウキョウが世界に対して持つ圧倒的な威力に、この時の私は感動すら覚えていた。
しばらくすると、終わりがないかに見えていた道の先に、小さな赤い屋根が見えてきた。

その日の夜は、部屋にあった大きな出窓のそばへイスと小さなテーブルを運び、部屋にあった電子レンジを使って2人だけの夕食会を開催した。購入したものがレトルトのグラタンで、マカロニだと思って食べていたものが実はイカだと気がついた時には、容器は三分の一が空になっていた。私は始終コーラをすすり、すっかり行き場をなくしたクマの黒い缶ビールは友人が飲んだ。
「ずっと思ってたけど主人もロビーの中も漂う変な匂い、あれ何だろうね」
友人がおもむろに口を開けた。
「最初は外人の匂いがするって思ってたけど、何なのかな」
とにかくこの部屋は外国独特の匂いがなくてよかったとイカを突いた。
「それにしても、ちょっとあの主人が可愛く見えてきたよね」
友人はビールを片手に笑っている。
「でも基本はむっつりしてるし愛想悪いよ。ここに住んでるのかな」
「多分ね、なんだか謎のおじいちゃんだよね」
意識したわけではなかったにせよ、夕食では自然と宿の主人が話題になった。

食後に携帯の wifi を繋げようとロビー棟へ行くと、一日の作業を終えてテーブルでくつろいでいた主人と会った。
「オーロラは見えそうかい？」
主人は私たちが防寒着を着込んできる姿を見て言った。
改まった形で主人と向かい合うと、主人は私たちが何か話すたびに顔を赤らめているのではないか、ということに気がついた。
「まだ見えていません。今日は見えそうな日ですか？」
「さあね」

何か手がかりでも知っているのかと思ったが、主人からは相変わらずの返事が返ってきただけ。それなのになぜか楽しそうにも見える。

「オーロラを見に庭に出てきます」

そう言って部屋を出ようとすると、何か不便なことはないか、問題はないかとしきりに主人が背中越しに尋ねた。

夜は日本の真冬以上の冷え込みだ。ヒートテック二枚、セーター、スキー用のウェア、靴下二枚、帽子と手袋。着込んでいるとはいえ、いつ出現するかわからないオーロラとの対面は通常の何倍もの忍耐を要した。ひとまず部屋に戻ることに決めた。出窓からはちょうどコテージの裏側が見えるようになっており、窓を全開にすると川と空がうまく見渡せる。寒いので服はそのままに、置きっぱなしにしていた椅子に座って待機した。

曇り空だった。雲がかかっていてはせっかくオーロラが現れたとしても見ることは出来ない。ひとまず雲が晴れたら外へ出ようということになった。

二人でどんな話をしただろうか。ここまでの旅の話と、それから日本へ帰ったら何をしたいか。私は転職活動を始めたいと言い、彼女は仕事を辞めようと思ってるというような話をした。いつの間にか二人とも椅子に座ったまま眠っていた。

目が覚めたのは、開けっ放しにしていた窓から差し込む、感じたことがないほどの冷気のせいだった。空はすっかり晴れていた。急いで耳当てと手袋をつけ、友人はカメラを首から下げると勢いよく階段をおりて玄関へ出た。庭へ出て気がついたのは、思っていた以上に空は広く、一体どの方角を向いていればオーロラに気がつけるのかさっぱり分からないということだった。数分待ってみるが何も起こらない。もうあと十分、二十分待っても何も起こらない。寒がりの友人は根をあげて部屋へ戻りたいと言い出す始末。

仕方なく私だけ庭へ残り偵察を続けることになった。上を向けば首が痛いし、前だけを向いていたら後ろに出現した時に気がつけないかもしれない。あれこれ考えた挙句、芝生の上に寝そべることにした。羊飼いになったみたいな気持ちだった。雲がなくなったせいで満天の星空が見えた。

うっすらとした緑色のオーロラが、地上からまっすぐ上に突き刺すように見えたのはしばらくしてからだった。私は飛び起きると友人を呼びに宿まで走った。

「ヨーコ、ヨーコ」

腰が抜けそうになりながら着膨れした体を支え、部屋へ続く階段を大股で登っていく。

「早く早く」

呑気にも彼女は歯磨きをしている最中だった。

ちょっと待ってという彼女を引っ張り出して何とか中庭に連れ出す。
シラカバの間から、巨大な煙突がそそり立つように伸びたオーロラは力強くもはかない。徐々に色を薄め、ものの五分ほどで消えていった。
その後、空を横断するように緑色のオーロラがカーテンみたいに数分揺れたのを最後に、どこからともなく雲が空を覆い始め、私たちのオーロラ鑑賞は終了した。

夜が明けて朝、次の滞在地へ移動するためロビー棟を訪れると主人が出迎えてくれた。
「オーロラは見えたかい？」
明るい時間だと、目を合わせた時に主人の顔が赤くなっていく様子がよく分かった。そして時々両唇の端が上がっていることにも気がついた。
「とっても綺麗でした、薄い緑色でした」
存在感は圧倒的であったものの、あっけなく消えていったオーロラは決して人生を変えてしまうほど豪華なものだったわけではない。旅行前に二人で見ていたインターネットや本のオーロラなんかとは比べ物にもならない。友人なんかはわざわざ日本から大切に運んできた一眼レフのシャッターを一度も押さなかったくらいだ。ただ、通り一遍の英単語しか知らない私たちが口々に話すと「とてもすごい！」が、ワンダフルやエクセレントのような最上級の単語となり、繰り返し発言されたために実物以上の素晴らしいオーロラが見えた、みたいな感じになってしまった。主人は私たちの勢いに戸惑った様子を見せ、話が一息ついたところで奥へ引っ込んでしまった。
戻ってきた時は両手にコーヒーを二つ持っていた。無言でテーブルに置き、私たちに座るようジェスチャーをする。まだ朝は早く、外は冷えた。暖かいコーヒーが喉を通ると体全体が温まっていくようだった。

寒い冬には、長くながく暗い夜が続くこの国に住む主人は、もしかすると私たちが想像できないほどの人見知り屋なのかもしれないし、照れ屋なのかもしれない、コーヒーを飲みながら私はそんなことを考えていた。きっとここを訪れる人は少ないのかもしれないし、もしかしたら日本人はこんな辺鄙な場所にわざわざオーロラを見に来ないのかもしれない。
隣では、友人も主人のことについて色々と思い返しているようだった。
「やっぱりビール、飲まずにあげればよかったね」
コーヒーカップに口をつけながら友人が言った。
「きっと遠慮しただけだったんだ」
しばらくして奥の部屋から二人の話し声が聞こえ、主人が焼きたてのパンを皿に乗せてこち

らへ向かってくるのが見えた。